

近畿地方の万葉粒集と風景画シリーズ（第二十二回）

きささ

を

がわ

# 「象の小川」

昔見し 象の小川を 今見れば い

さや

よよ清けく なりにけるかも

おおとものたびと

作者・大伴旅人 卷三―三二六

（解説）昔見た象の小川を今ふたたび見ると、流れは昔にもましていよいよますます清らかである。

①象の小川は奈良県の中部にある古来から桜の名所と

あおねがみね

して有名な吉野山の最南端にある「青根ヶ峰（標高

858m）」等を水源として山合いを北流し奈良県吉

きさ

野郡吉野町の喜佐谷を流れ「吉野離宮跡」と考えら

とつみや

れている同町にある国の史跡「宮滝遺跡」みやたきいせきの対岸で  
吉野川に注ぐ小川である。

②万葉集に詠われている「象の小川」キサは今の喜佐谷川  
の古名であり、また、「キサ」の名の由来は古代朝鮮  
語で「象」ぞうのこととされており象のようにギザギザに  
曲折して流れることから付けられたとの伝えがある。

③この歌の作者・大伴旅人は当時中納言として聖武天  
皇・吉野行幸ゆきのゆきの際に作られた歌で聖武天皇初年、神  
亀元年（七二四年）三月のことと推定されている。

なお、大伴旅人はこの歌を詠んだのち太宰府帥そち（長  
官）として赴任することとなる。

（参考文献）新潮日本古典集成・山崎しげ子著「万葉を歩く」等

(写生地)

奈良県吉野郡吉野町喜佐谷（大字）の集落と今も昔  
のままと思われる清らかさで集落の中を流れる象の小  
川（現・喜佐谷川）を描く。（池田杏花）

